ポンスケだぬき

Lazy Yoshi

はじめに

　書いた作品を自らボツにするには、忍びないので、童話集にしてみました。

　絵本向けのテキスト、童話、意識した対象年齢もバラバラです。あらためて読み返してみると、おかしな所や、直したい所も沢山出て来ます。それでも、今は、そのまま公開する事にしました。いつの日か、書き直す日が来るかも知れませんが、それはそれで、新たな別の作品になってしまう気がするからです。

ポンスケだぬき

　少し昔の森深い村のお話のはじまり、はじまり。村はずれに、数匹の子狸がおったとさ。子狸達は、村の子達と仲良く遊びたい。じゃが、人を化かす狸を子供達はいじめたと。ある月夜の晩、ポンスケ狸が、息をハアハア切らせ村里から逃げ帰ってきたとさ。

「いてぇよ。いてぇよ。村のやつらが、石を投げつけやがった。狸に返った瞬間さ。あいつら、俺様が、子犬に化けていた時はよぉ。頭なんか撫でて遊んでくれたのによぉ。甘えついでに、カプッとくわえたとたん、ボコンと一発さ。さすがの俺様も、ビックリギョウテン。元の姿に戻っちまった。そのとたんに、石の雨さ。」
「そりゃひでぇ。」「そりゃひでぇや。」「あいつらいつも手加減無しさ。」口々に遊び仲間の子狸達はポンスケに同情しました。
　それをかたわらで聴いていた狸の長老。大きなお腹を撫でながらポンスケ達を諭すのでした。
「ポンスケ。ポンスケや。それはお前さんが悪い。急に噛みついたら誰でも怒るぞ。それも、かわいい子犬がよ、嫌われ者の狸じゃ、なおさらじゃ。」
「長老様。だって狸の姿じゃ遊んでくれもしない。カプッとしたのも、ほんの少し…。」ポンスケの言訳も終わらぬうちに長老は、きっぱりと言いました。
「お前が軽い気持ちで噛んだにせよ、人様というのは、驚くものじゃ。お前達と違って、噛み合うという遊びをしらないからのぉ。少しは、人様の気持ちを思いやるものじゃて。ましてやのぉ。人様は狸を良くは思ってはおらぬ。」
「何でじゃ。何でじゃ。犬も狸も変わらん。」口惜しさをかくしきれないポンスケの言葉に長老は、微笑みながら話し始めるのでした。
「それはのぉ…。わしら年寄り狸のせいなのじゃ。わしらが、お前達位の子狸の頃よのぉ。さんざん、人様を化かしたものじゃ。わしらは、どれほど人様をだませるか皆で競ったのじゃ。わしは、石をアラレに見せかけて人様の歯をボロボロにしてやった。ポンスケ。お前の爺は、笑い茸をマツタケに変えて人様に食べさせた。お陰で村中が笑いの渦。大事な畑仕事も出来ないありさまじゃったぞ。わしらは、それを木の陰からのぞいて笑い転げたものじゃ。」
「そりゃ面白れぇ。噛み付くなんてつまらん。俺らも爺達のように、もっともっと、すごい事を考えよう。」ポンスケ達が、わくわくしながらいたずらを想像し始めたとたん、それをさえぎるように、長老は話を続けました。
「これこれ。お前達。ろくでもない事を思うでない。この話には、まだ続きがあるのじゃ。あまりのいたずらに怒った人様はのぉ。ある日、一匹のわしらの仲間を捕まえ、狸汁にして食べてしまったのじゃ。いたずらを自慢しあっていたわしらも、さすがに幾夜も泣きじゃくったのじゃ。」いたずらに思いをめぐらせはじめていたポンスケ達も、楽しさはうすれ、しんみりとなりました。
「ポンスケ。いたずらは本当に楽しいものじゃて。でもなぁ。やりすぎはだめじゃ。わしらは、やりすぎた。だから大切な仲間をなくしてしまった。やりすぎはだめじゃて…。それからは、狸の姿のまま人様の前に出られなくなくなってしまったのじゃ。かわりに子犬の姿に化けて里にお

りたのじゃ。お前達にはすまんことをしたのぉ。ありのままの姿で、遊べなくしてしまったのは、わしらのせいなのじゃよ。」その話を聞き終えるやポンスケは、ポンと大きな腹鼓を鳴らしました。
「長老様。気にせんでいい。気にせんでもいい。人様と遊べるだけでいいんじゃ。狸の姿じゃなくても遊べればいいんじゃ。でもなぁ…。」何か言いたりない様子のポンスケです。
「なんじゃ。」長老はポンスケに目をやりました。
「でも…。やっぱり…。少しは…。いたずらしてみてぇ。ほんのちょっぴり人様をからかってみてぇ。」
「そうだ。そうだ。そのとおり。」ポンスケの言葉をはやしたてる子狸達を尻目に、長老は、しばし考えてこう言いました。
「お前達。これだけは約束するのじゃぞ。噛みつくのは無しじゃ。たとえカプッと軽くでもじゃ。その代わり、人様が傷ついたり、困ったりしない、いたずらならたまにはよい。だが、いつもはだめじゃ。これを守れるか。」ポンスケ達は、今度は皆で、ポンと大きな腹鼓を鳴らしました。

　このお話はこれでおしまい。今じゃ、村で、子犬にかまれる者はいなくなったと。月夜の晩は、ポンと大きな腹鼓を鳴す子犬に、驚く村人で大賑わいだとさ。

ポンスケだぬき 読み聞かせ版 1

　少し昔の森深い村のお話のはじまり、はじまり。村はずれに、数匹の子狸がおったとさ。子狸達は、村の子達と仲良く遊びたい。じゃが、人を化かす狸を子供達はいじめたと。ある月夜の晩、ポンスケ狸が、息をハアハア切らせ村里から逃げ帰ってきたとさ。

「いてぇよ。いてぇよ。村のやつらが、石を投げつけやがった。狸に返った瞬間さ。あいつら、俺様が、子犬に化けていた時はよぉ。頭なんか撫でて遊んでくれたのによぉ。甘えついでに、カプッとくわえたとたん、ボコンと一発さ。さすがの俺様も、ビックリギョウテン。元の姿に戻っちまった。そのとたんに、石の雨さ。」
「そりゃひでぇ。」「そりゃひでぇや。」「あいつらいつも手加減無しさ。」口々に遊び仲間の子狸達はポンスケに同情しました。
　それをかたわらで聴いていた狸の長老。大きなお腹を撫でながらポンスケ達を諭すのでした。
「ポンスケ。ポンスケや。それはお前さんが悪い。急に噛みついたら誰でも怒るぞ。それも、かわいい子犬がよ、嫌われ者の狸じゃ、なおさらじゃ。」
「長老様。だって狸の姿じゃ遊んでくれもしない。カプッとしたのも、ほんの少し…。」ポンスケの言訳も終わらぬうちに長老は、きっぱりと言いました。
「お前が軽い気持ちで噛んだにせよ、人様というのは、驚くものじゃ。お前達と違って、噛み合うという遊びをしらないからのぉ。少しは、人様の気持ちを思いやるものじゃて。ましてやのぉ。人様は狸を良くは思ってはおらぬ。」
「何でじゃ。何でじゃ。犬も狸も変わらん。」口惜しさをかくしきれないポンスケの言葉に長老は、微笑みながら話し始めるのでした。
「それはのぉ…。わしら年寄り狸のせいなのじゃ。わしらが、お前達位の子狸の頃よのぉ。さんざん、人様を化かしたものじゃ。わしらは、どれほど人様をだませるか皆で競ったのじゃ。わしは、石をアラレに見せかけて人様の歯をボロボロにしてやった。ポンスケ。お前の爺は、笑い茸をマツタケに変えて人様に食べさせた。お陰で村中が笑いの渦。大事な畑仕事も出来ないありさまじゃったぞ。わしらは、それを木の陰からのぞいて笑い転げたものじゃ。」
「そりゃ面白れぇ。噛み付くなんてつまらん。俺らも爺達のように、もっともっと、すごい事を考えよう。」ポンスケ達が、わくわくしながらいたずらを想像し始めたとたん、それをさえぎるように、長老は話を続けました。
「これこれ。お前達。ろくでもない事を思うでない。この話には、まだ続きがあるのじゃ。あまりのいたずらに怒った人様はのぉ。ある日、一匹のわしらの仲間を捕まえ、狸汁にして食べてしまったのじゃ。いたずらを自慢しあっていたわしらも、さすがに幾夜も泣きじゃくったのじゃ。」いたずらに思いをめぐらせはじめていたポンスケ達も、楽しさはうすれ、しんみりとなりました。

「ポンスケ。いたずらは本当に楽しいものじゃて。でもなぁ。やりすぎはだめじゃ。わしらは、やりすぎた。だから大切な仲間をなくしてしまった。やりすぎはだめじゃて…。それからは、狸の姿のまま人様の前に出られなくなくなってしまったのじゃ。かわりに子犬の姿に化けて里におりたのじゃ。お前達にはすまんことをしたのぉ。ありのままの姿で、遊べなくしてしまったのは、わしらのせいなのじゃよ。」その話を聞き終えるやポンスケは、ポンと大きな腹鼓を鳴らしました。
「長老様。気にせんでいい。気にせんでもいい。人様と遊べるだけでいいんじゃ。狸の姿じゃなくても遊べればいいんじゃ。でもなぁ…。」何か言いたりない様子のポンスケです。
「なんじゃ。」長老はポンスケに目をやりました。
「でも…。やっぱり…。少しは…。いたずらしてみてぇ。ほんのちょっぴり人様をからかってみてぇ。」
「そうだ。そうだ。そのとおり。」ポンスケの言葉をはやしたてる子狸達を尻目に、長老は、しばし考えてこう言いました。
「お前達。これだけは約束するのじゃぞ。噛みつくのは無しじゃ。たとえカプッと軽くでもじゃ。その代わり、人様が傷ついたり、困ったりしない、いたずらならたまにはよい。だが、いつもはだめじゃ。これを守れるか。」ポンスケ達は、今度は皆で、ポンと大きな腹鼓を鳴らしました。

　このお話はこれでおしまい。今じゃ、村で、子犬にかまれる者はいなくなったと。月夜の晩は、ポンと大きな腹鼓を鳴す子犬に、驚く村人で大賑わいだとさ。

木蓮の花びら

　白い大きな木蓮の花びらが、僕は嫌いだ。木蓮の花が嫌いなのではなく、花びらが嫌いだ。地面に落ち、踏まれて黒ずんでいる、その花びらが嫌いなのだ。
　小学三年生になった頃、お父さんは、僕にこう言いつけたのだった。
「お前も、もう三年生なのだから、毎朝玄関の前を掃除しなさい。」僕の家では、お父さんの言いつけは絶対だ。僕は、次の朝から玄関先を竹の箒で掃くことになった。嫌でもなかったけれど、楽しくも無い。でも、お父さんの言いつけでは、やらない訳にはいかない。仕方無しに玄関の掃除を続けていた。
　ある朝、近所の小母さんが、掃除をしている僕を見つけ声をかけてきた。
「おはよう。偉いわねぇ。」僕は、照れ笑いしながらお辞儀だけをした。偉くなんかねぇや、心の底では、そう思っていた。お父さんから言われたからやっているだけだ。偉くも無い。それよりも、近所の小母さんに見つかってしまった事が気を重くした。これで、簡単には掃除をやめられない。止めたら、偉い子から、三日坊主に転落する。そんな恐怖心が生まれたのだ。いつまで掃除を続けるのかな。嫌でもないけど、好きでも無い事をいつまでも続けなければならないという事が心を重くするのだった。これが、夏休みになるまでとか、四年生になるまでとかの終わりがあるのだったら、少しは、やる気が出たのかもしれない。でも、今の所、そんな終わりは見えないのだ。いつまでやるのだろう。何度も何度もそう思いながら、毎朝、玄関の掃除を続けるしかなかった。
　玄関の前の掃除というのは、一体全体どこまで掃除すればよいのだろう。隣の家の分、前の家の分、どこまですれば良いのか、よく分からない。きっちり範囲を決めて掃除をしても、目の前にゴミがあったら、掃除をしたことになるのだろうか。だいたい、ゴミだって自分の家のゴミじゃない。誰かが捨てっていったものや、風で他所から来たものが、ほとんどじゃないか。こう思うと、何故家の前を掃除しなければいけないのか、合点がいかない。
　合点はいかないものの、お父さんの言いつけに、反発する勇気もなく、毎朝掃除を続けていた、ある日の朝の事だ。家の前は、前の家の木蓮の花びらで、埋めつくされたかのようだった。大きな花びらは、すでに踏まれ黒くうす汚れていた。僕は、何んだか悔しくなって、涙をこぼしながら、無数の黒ずんだ花びらを箒で集めた。
「チェッ。」と不満を漏らした瞬間、お父さんが、後ろに立っていた。
「どうした。そんなんだったら、明日からやらなくてもいい。」冷たい声だった気がする。
「だって…。他所の家の花びらだよ。」不満の理由をやっとの思いで声にした。
「そうか。でもそれが、掃除というものだよ。誰が捨てたとかじゃなくて、ゴミがあるから、掃除するのじゃないのかい。」と言いながら、お父さんは、僕のおでこを軽く小突いた。
「でも、あんなにあるんだよ。」
「不満なのはわかるさ。元は、他所の家の花だからな。お父さんも、子供の頃、納得がいかなかったものさ。何度も何度も、あの木蓮の木が無くなればいいのに、と思ったものだ。」
「えっ。お父さんも、掃除させられたの。」
「そうさ。お祖父ちゃんに言われて、仕方無しにやったものさ。お前と同じ三年生に、なる頃だ

った。」
「そうなんだ。やっぱり仕方無しにやってたんだ。」
「そりゃそうさ。掃除なんか、少しも楽しいものじゃない。たまに、ほめてくれる人もいて、一瞬嬉しくもなるが、毎日続けば、すぐに嫌気がさす。でも、お祖父ちゃんに言われたら、嫌とは言えなかったんだ。」
「なんで。お祖父ちゃん、怖くないじゃない。」
「お前たち、孫には、優しいな。でも、父さんたちには、厳しかったんだぞ。」
「そうなんだ。お父さんも、してたんだ。」僕は、なんとなく満足した。意外にも、お父さんも、お祖父ちゃんには、頭が上がらなかった事が、僕の気持ちをすっきりさせた。
　それからも、毎朝、玄関の掃除は続いた。以前のような仕方無しという気は薄らいでいた。そして、木蓮の花が終わってしばらくした頃、お父さんは、こう言った。
「明日から、掃除はしなくてもいいよ。」
「本当？ありがとう。」何故か、僕はお礼を言った。こうして、朝の日課から解放されたのだった。

　大人になった今でも、木蓮の花びらを見るたびに、朝の掃除の事を思い出す。しかし、いつしか前の家の木蓮の木は、無くなっていた。

すこしむかしのはなし

①
パーフー、パーフー。
おとうふやさんの
ラッパのおと。

トントン、トントン。
まないたのおと。
おみおつけつくる、
おかあさんのおと。

あまどのすきまに、おひさまさしこむ。
ガラガラ、ガラガラ。
あまどをあける、
ぼくのおと。

モクモク、モクモク。
たばこをくわえる、
おとさん。
②
スモッグをきて、
バッグへおべんと、
じゅんびかんりょう。
ようちえんに、しゅっぱつだ。

「いってきます。」
げんかんの
ぼくのこえ。

「いってらっしゃい。」
だいどころの
おかあさんのこえ。

「いってきな。」
しごとばの
おとうさんのこえ。
③

スキップ、スキップ、
あっというまに、
ようちえん。

「おはようございます。」
ぼくのこえ。

「おはよう。」
やさしい、やさしい、せんせいのこえ。

「おはよう。」
ちょっぴりこわい、えんちょうせんせい。

「おはよう。」「おはよう。」「おはよう。」
げんきな、げんきな、
みんなのこえ。
④
あそびのじかんだ、
なにして、あそぼ。

ギッタン、バッコン、
シーソーはねる。

ギーコー、ギーコー、
ブランコゆれる。

クルリン、クルリン、
てつぼうまわる。

クレヨンだして、
ぼくはおえかき。
⑤
グーグー、
おなかがなった。
おべんとだして、
おひるのじかん。

コップもだして、
たっぷりミルク。

「いただきます。」
みんなそろって、
「いただきます。」

たべおわったら、
「ごちそうさま。」
たべたひとから
「ごちそうさま。」

さいごに、みんなで、
「ごちそうさま。」
⑥
おべんとおわった、
かえりのじかん。

みんなそろって、
「せんせい、さようなら。」
「みなさん、さようなら。」

かえりのみちは、
なかよしみんなで、かえります。
わかれみちになったなら、
「バイバイ。」
「バイバイ。」
あっちも、こっちも、
「バイバイ。」
「バイバイ。」
⑦
「ただいま。」
げんかんの
ぼくのこえ。

「おかえり。」
しごとばの
おとうさんのこえ。

「おかえりなさい。」
さいほうしている、
おかあさんのこえ。

おやつは、なぁに。
ぼくはまいにち、
おやつをさがす。
いつものカンを
あけてみる。

パリッ、パリッ、
きょうのおやつは、
おせんべい。
⑧
トントン、トントン、
しごとばのおと。
トントン、トントン、
げんのうのおと。
トントン、トントン。
おとうさんのおと。

ごはんは、なぁに、
ぼくのこえ。
カレーライス、
おかあさんのこえ。

ニコニコ、ニコニコ、
ぼくのかお。
カレーだいすき、
ぼくのかお。
⑨
「いただきます。」
みんなそろって
ばんごはん。

おさしみ、
つまみの

おとうさん。
おさけをのんでる
おとうさん。

ぼくのおさらに、
カレーライス。
おかあさんのおさらにも、
カレーライス。

ごはんをたべたら、
ごちそうさま。

いちばんビケは、
おとうさん。
おさけをのんでる、
おとうさん。
⑩
ガチャガチャ、ガチャガチャ、
チャンネルのおと。
ガチャガチャ、ガチャガチャ、
テレビのチャンネル。
ガチャガチャ、ガチャガチャ、
ごはんのあとは、
ぼくのチャンネル。

ガチャガチャ、ガチャガチャ、
チャンネルまわすと、
しかられる。

ガチャガチャ、ガチャガチャ、
チャンネルのおと。
ガチャガチャ、ガチャガチャ、
ごはんのあとは、
ぼくのチャンネル。

ガチャガチャ、ガチャガチャ、
チャンネルまわすと、
しかられる。

⑪
「おやすみなさい。」
八じになった。
「おやすみなさい。」
おねむのじかん。

ぼくのとなりは、
おとうさん。
おとうさんのとなりは、
ぼくのばしょ。

きょうは、おはなしあるのかな？
きょうも、おはなししてくれる？

ぼくのとなりは、
おとうさん。
おとうさんのとなりは、
ぼくのばしょ。

きょうは、おはなしあるのかな？
きょうも、おはなししてくれる？

せみしぐれ

　ヂーヂー。その日は、せみが、うるさいほど鳴いていました。暑い暑い、小学三年生の夏休みの一日でした。
「た、け、る、ちゃん！」お隣のお兄ちゃんを呼びました。今日は、楽しみにしていた、せみ取りに行く約束の日です。大きな麦わら帽子をかぶった、たけるちゃんが、虫取り網とカゴを持って出てきました。
「なんだ、帽子ないじゃないか。取って来なよ。」命令のように、たけるちゃんは言いました。
「うん。」僕は、大急ぎで取りに戻りました。たけるちゃんは、二才年上。いろんな事を、教えてくれます。僕も麦わら帽子にしよう。そう思ったのですが、パパの大きなやつしか見つかりません。ぐずぐずしてはいられません。僕は、大きなパパの帽子をかぶって、飛び出しました。
「ブカブカじゃないか。まあ、いいか。熱中症になるよりましさ。」たけるちゃんは、おかしそうに言いました。
「早く行こうよ。」僕は、たけるちゃんの手をひっぱり公園に向かって歩き始めました。
「あっちゃん。せみは、オシッコをひっかけるんだぞ。知ってるか。」
「本当？」
「本当さ。捕まりそうになると、オシッコをひっかけて、逃げ出すんだ。だから、せみを見つけたら、素早く網をかぶせないとだめだぞ。もたもたしてると、オシッコだらけになる。」そんなことを聞いて、僕は、少し心配になりました。
「うまく捕まえられるかな？」
「うまくもなにもないさ。もたもたしてたら、オシッコだらけ。ひっかけられる前に、捕まえればいい。」
「わかった。」何を言っても無駄みたいです。あきらめて、そう言いました。
　ヂーヂー。公園のあちらこちらで、せみの声が聞こえます。あっという間に、たけるちゃんは、せみを見つけて、網をかぶせ、暴れるせみをカゴに入れます。
「こんな具合さ。今日は、せみがいっぱいいるみたいだ。あっちゃんもボケッとしてないで捕まえな。」
「うん。」そう答えたものの、せみのオシッコが、気になって捕まえる勇気がわきません。そんな事は、お構いなしに、たけるちゃんは、せみを追いかけては、見事に捕まえます。みるみるうちに、虫カゴは、せみで、あふれました。
「あっちゃん。少し休もう。」たけるちゃんが、声をかけ、大きな木に向かって歩いて行きます。僕も、後を追いかけ、木陰で腰を下ろしました。
「なんだ。一匹も捕れてないのか？」
「うん。」僕は、しょんぼりと頭を下げました。
「まあ、いいさ。せみの一生は一週間。無理に捕まえる事もないさ。」
「一週間？一週間しか生きられないの。」ビックリしながら、たけるちゃんに、聞き返しました。
「そうさ。たった一週間さ。長い間土にもぐっていて、土から出てきて、自由に空を飛べるよう

になってから一週間の命。だから、捕まりたくなくて、オシッコするのさ。」僕は、たけるちゃんのせみでいっぱいのカゴを見つめました。捕まえなくて良かったと思いました。
「ヂーヂー鳴くだけの一週間。でも、一生懸命鳴いているんだ。」
「そうなんだ。せみなんか捕りに来るんじゃなかった。」
「そうか。一週間の命だものな。逃がしてやるか。」
「うん。せっかく捕まえたのに、ごめん。でも、逃がしてあげようようよ。」
「おしいが、逃がすとするか。」たけるちゃんは、おどけながら、カゴを開けました。せみは、いっせいに飛び出して行きました。
　ヂーヂー。せみは鳴き続けています。
「来なけりゃ良かったな。」たけるちゃんは、言いました。
「そんなことないよ。たけるちゃんが、せみを捕まえるとこ、カッコ良かったよ。カゴいっぱいだったのも、うらやましかったもん。」
「一週間なんて言わなきゃ良かったな。」
「そんなことないよ。ビックリしただけ。」
　ヂーヂー。まだ、せみは鳴き続けています。
「今日みたいな、たくさんのせみの鳴き続けてるのを、『せみしぐれ』って言うんだ。雨の音みたいだ、って言う事さ。」
「へぇぇ。雨の音なんだ。」そんな風に言われると、だんだん雨の音のように聞えてきました。
　ヂーヂー。いつまでも、いつまでも、せみは鳴き続けていました。暑い暑い、夏休みの一日でした。

ヒゲ　スイカの巻

　「たっだっい～まぁ～」サッカーの練習が終わって、玄関のドアを開けると、足の形にへっこんだビーチサンダルがあった。ヒゲだ。
「ツナ、ヒゲが来てるよ。」奥の方から、ママが大きな声で言った。やっぱり。ヒゲだった。
　ヒゲは、僕の伯父さんだ。ママのお兄ちゃんなのに、ママは、いつもヒゲと呼んでいる。だから、僕もヒゲと呼んでやる。お姉ちゃんのミユもヒゲと呼ぶ。パパだけは、少しだけ気を使っているのか、ヒゲちゃんと呼んでいる。
　ランドセルを勉強部屋に置いて、リビングに走って行くと、ヒゲが、ビールを飲みながら、声をかけてきた。
「オウ！。」たったそれだけだ。普通の大人ならもう少し気の利いた挨拶をするもんだ。僕は、いつもの通り、ママにおやつの確認した。
「おやつなぁに？」
「ヒゲが、すいかを買って来てくれたから、すいかを切ろうか。」ママは、冷蔵庫を開けながら答えた。ウンと答える暇もないうちに、ヒゲは、ビールを飲み干して、
「ツナ、ビール。」と、新しいビールを催促した。僕は、冷蔵庫にビールを取りに行って、ママの間に潜り込みながら、パパのビールを取った。
「パパのビールでいい？。」
「うん。何でもいい・」ヒゲは、ともかく早く持って来いという仕草で言った。僕は、ヒゲにビールをついであげた。
「気が利くじゃないか。すいかの力だな。まあ、食べな。」ヒゲは、ビールのお礼のつもりなのか、僕にママが切ってくれたすいかを勧めた。
「今日何して来た。夏休みは、勉強なんかしないで、うんと遊ばなきゃだめだ。宿題なんか、夏休みの始めに終わらせるぐらいじゃないと、立派な大人になれないからな。俺なんか、夏休み前に終わらせてたもんだ。」出鱈目に決まっている。僕は、すいかをスプーンで一口すくいながら、ヒゲはいつもホラばかり吹くと思った。でも、気を利かせて驚いた振りをした。
「えっ！本当？でも、夏休みの前に宿題は、出ないよ。」
「ツナは、スプーンで食べるのか？」ヒゲは、本当に驚きながら、
「すいかは、スプーンで食べたって、美味くない。両手でつかんで、ガブッと、かぶりつく。そして、種をペペッとお皿に出すんだ。そうすれば、百倍は美味しくなる。」
「本当？ヒゲは、出鱈目ばかり言うからな。」
「本当もなにも、試してみな。美味くなること間違いなしだ。」僕は、ママが見ていないことを確認して、ガブッといってみた。そして、種をペペッとお皿に出そうとしけど、お皿から飛び出していった。
「下手糞だな。そんな事じゃ、すいかのプロには、なれないぞ。でも、スプーンで食べるよりも、美味いだろう。」
「うん、美味い。なんか口中が、すいかだらけになって美味い。いつもより、甘い感じがする。」

「だろう。俺様の言うことに、間違いはない。もう一つ良い事を教えてあげる。出っ歯の人は、すいかが食べやすいんだ。ぺぺッと種を出す時、邪魔にならないからだ。今度、ママがすいかを食べる時は、良く観察するんだぞ。そうだ、それを夏休みの自由研究にすればいい。」ヒゲは、調子にのって、また出鱈目を言った。でも、面白そうな気もする。だって、ママは少し出っ歯だ。

仕事の一段落したママが、リビングに戻ってきて、僕の隣に座った。

「ママも、すいか食べなよ。美味しいよ。ヒゲが、美味しい食べ方教えてくれたんだ。ガブッとかぶりついて、ぺぺッと種を出すんだよ。」ママは、ヒゲを睨みながら、スプーンで、すいかを食べ出した。

「ヒゲ！くだらない事ばかり教えないの。まったく、大人のくせにロクな事言わないんだから。」少しがっかりだ。僕は、ママが、すいかの種を出すところを見たかった。

「ツナ。ヒゲの言う事は出鱈目ばかりだから、聞いちゃだめよ。すいかは、スプーンで食べなさい。」

「ツナ。すいかは、ガブッとだぞ。その方が美味い。ママだって、子供の頃は、ガブッと、ぺぺッだっつたんだ。それは、見事に、ぺぺッと…」

「ツナ。もう、ビール出さなくていいから。」

ママは、まだ少し怒っている。

「ママ。スプーンで食べるよ。だから、ビール出してもいい？」

「ツナ。ありがとう。ママはスプーンで食べればいい。ツナは、好きに食べればいい。」ヒゲは、また、美味しそうにビールをグビッと飲んだ。ママも、もう笑っていた。僕は、ママのすいかの種を出す仕草を想像した。

ヒゲ　虫取りの巻

「たっだっい～まぁ～」玄関のドアを開けると、足の形にへっこんだビーチサンダルがあった。ヒゲだ。
「ツナ、ヒゲが来てるよ。」奥の方から、ママが大きな声で言った。やっぱり。ヒゲだった。
　ヒゲは、僕の伯父さんだ。ママのお兄ちゃんなのに、ママは、いつもヒゲと呼んでいる。だから、僕もヒゲと呼んでやる。お姉ちゃんのミユもヒゲと呼ぶ。パパだけは、少しだけ気を使っているのか、ヒゲちゃんと呼んでいる。
　サッカーボールを玄関に置いて、リビングに走って行くと、ヒゲが、ビールを飲みながら、声をかけてきた。
「オウ！。」たったそれだけだ。普通の大人ならもう少し気の利いた挨拶をするもんだ。僕は、いつもの通り、ママに夕ご飯の確認した。
「ご飯なぁに？」
「ヒゲが、たこ焼き勝ってきたから、それ食べてて。」ママは、冷蔵庫を開けながら答えた。ヒゲは、ビールを飲み干して、
「ツナ、ビール。」と、新しいビールを催促した。僕は、冷蔵庫にビールを取りに行き、ママの間に潜り込みながら、パパのビールを取った。
「パパのビールでいい？。」
「うん。何でもいい・」ヒゲは、ともかく早く持って来いという仕草で言った。僕は、ヒゲにビールをついであげた。
「気が利くじゃないか。たこ焼き好きだろう。熱いうちに食べな。」ヒゲは、ビールのお礼のつもりなのか、僕にたこ焼きを勧めて、
「今日何して来た。夏休みは、勉強なんかしないで、うんと遊ばなきゃだめだ。宿題なんか、夏休みの始めに終わらせるぐらいじゃないと、立派な大人になれないからな。俺なんか、夏休み前に終わらせてたもんだ。」出鱈目に決まっている。僕は、冷め始めた、たこ焼きをほうばりながら、ヒゲはいつもホラばかり吹くと思った。でも、気を利かせて驚いた振りをして、
「えっ！本当？でも、夏休みの前に宿題は、出ないよ。」
「俺の頃は、終業式の前の日に、宿題が出たもんだ。だから、終業式の日には、もう終わっていたもんだぜ。夏休みの最後の日に、宿題を片付けるなんて、夏休みの過し方を知らない奴のする事だ。そんな奴は、大人になってビールばかり飲み続ける様になるに決まってる。」平気でホラをふき続けているヒゲを僕は、からかいながら、
「それじゃ、ヒゲは、夏休みの最後の日にやってたんだ。だって、ビールばかり飲んでるもん。」ヒゲは、ビールを噴出しそうになりながら、
「そんな事はない。俺は天才だから、宿題は、夏休みが終わってからやった。始業式の日には、宿題を提出しないでよい。これは、昔から先生と生徒の間に交わされている暗黙の約束だ。」
「だから、ヒゲはビールばっかり飲んでるんだ。」僕が、ヒゲのホラに付き合っていると、ママが、
「今日、スパゲッティでいい？」と言いながら、ビールのつまみに、チーズとウインナを持って

来てくれた。
「いいね！ゲティ、ゲティ、スパゲティ。」ヒゲは、訳も分からない節をつけて、天然パーマの紙を揺らしている。ご機嫌の証拠だ。もう宿題の事は忘れたようだ。
「ツナ。今日何してきた？」ヒゲが、終わったと思った質問をまた始めた。
「公園で、友達とサッカー。」僕は、義務的にに答える。
「サッカーか。つまらん。もっと夏休みらしい事は、しないのか？公園でキャンプするとか…」
「キャンプなんか、公園でしたら怒られるに決まってるよ。ヒゲじゃあるまいし。」ヒゲは、若い頃公園で寝ていたらしい。ママがお婆ちゃん達と笑いながら話していた事を思い出した。そのせいか、ヒゲは、ブルーシートや、ダンボールハウスの話が出てくると、目を輝かせながら、ダンボールハウスで寝る時の注意点などを自慢げにひけらかす。でも、きっとホラだ。予想通りの答えといった風情でヒゲは話しかけてくる。
「キャンプはダメか。それはそうだな。子供達が、公園でキャンプを始めたら、ホームレスの人達が困るからなぁ。」ヒゲは、どうやらホームレスの人達には、やさしいらしい。
「ビール。」ヒゲは、頭をかきながら、僕にまた催促した。
「はい。ヒゲって本当にビールが好きだね。そんなに飲んで、オシッコもらさない？」僕のそんな心配をよそに、ヒゲは何か思い付いた風だ。
「カブトムシとかクワガタを捕まえたりしないのか？あんなにゲームで遊んでいるじゃないか？」
「公園には、カブトムシもクワガタもいないよ。クワガタがいれば、僕だって捕まえているさ。いやしないから、お店で売ってるんだよ。」ヒゲは、そんな事も知らないらしい。
「売ってるのか？虫を捕まえる。そこが面白いのに。一番楽しい所が無いなんておかしな話だ。」ヒゲは、珍しく真剣な顔をしながら、またまた、ビールを飲み干した。
「ツナ。これから、カブトムシを捕まえに行くか？」ヒゲは、急に言った。
「エッ。カブトムシなんていないよ。」
「バカだな。やってみなくちゃ判らないだろ。いるかいないかは、やってみて、初めて判るんだぞ。捕まえられない時に、初めて、いないと言えるんだ。それに、捕まえるというのは、虫との知恵比べだ。カッコよく言えば、虫との戦いだ。行こうぜ。」
「エー。面倒くさいな。」
「行こうよ。ツナ。お願いだから。」ヒゲはもう行く気満々だ。
「砂糖水を作って。懐中電灯を用意して。網、虫籠は、もちろん必要だ。あと、虫よけクリームを塗って。準備開始だ。いいな。」
「何で、砂糖水なんているの？」
「そんな事も知らないのか。カブトムシは、樹液を食べているんだ。だから、砂糖水でだましておびきよせるんだ。」
「へエー。じゃあ、ジュースでもいい？」
「もちのろん。そういう工夫が、虫との戦いを、よりエキサイティングなものにするんだ。ツナも分かって来たじゃないか。」

「じゃあ。コーラも持って行こう。」そんな事を考えているうちに僕もだんだんその気になってきた。
「ママ。行ってきま～す。」ヒゲと僕は、ワクワクしながら懐中電灯を片手に、夜の公園に向かった。ペタ。ペタ。ヒゲのサンダルの足音が闇の中に響いていた。